



## 有限会社井清織物

境野町の(有)井清織物は戦後間もなく、本家である井甚織物から独立し昭和28年に初代井上清氏が創業した帯の織元。現代表であり3代目の舜永(きよなが)氏が会社に入る昭和35年ごろには、全従業員50人以上を数え、自社内で整経から染めまで一貫して行うことができた大規模な機屋であった。

しかしながら、時代と共に変化するライフスタイルによって着物の需要は徐々に低下し、昭和20年代には境野町だけで100件以上あった機屋も現在では10件程度にまで減少した、と厳しい現状について舜永氏は言う。

そんな中、4代目となる義浩氏が東京から戻り家業を継いだのは平成17年。義浩氏はもともと東京でテレビ番組の制作会社に勤務しており繊維とは程遠い業界にいたが、仕事で海外に行った際に自国の文化を誇る外国人の姿勢に触れ、「日本の民族衣装＝着物」の帯を織ることは日本人として誇るべき仕事であり「替えの利かない仕事」と、地元に戻り伝統産業を継ぐ決心をした。努力や研究を重ね自分の帯で、ある程度、成果を出せるようになってきたところ、以前より「伝統産業」の響きに違和感を覚えていた義浩氏は、着物をもっと日常生活に身近なものとして感じてもらうため、服飾生活雑貨ブランド「OLN(オルン)」設立に踏み切る。ブランド名は桐生弁の「織るん？」から名付けられ、そのコンセプトには「織物で私たちの日々の暮らしを彩りたい」という思いが込められている。商品開発はアパレルデザイナーだった妻の忍さんと二人三脚で行い、ネックウォーマーや麻ふきん、シルクストールなど、それぞれに2人の高い感性が溢れる。

「いつかは直接消費者と接することができるファクトリーショップも検討していきたい」と義浩氏、一方で舜永氏は「要求される商品を自分たちで作って売るシステムを作ることが必要」と語る。伝統の帯と新しいスタイルの「OLN」、共に相乗効果が出始めている井清織物では、世代や経験は異なる3代目と4代目が事業発展へビジョンを共有している。

7月1日からは「わびさびや」(新宿3-4-49)にて、2週間限定の展示販売会を開催予定。

- 場 所／桐生市境野町6-344
- 電 話／0277-44-3568
- H P／<http://www.inokiyo.com/>



「伝統」をもっと身近に  
織物で日々の暮らしを彩る